

明和六年正月十一日

御城之御會

山河

昌桂

消雪如みしるる子尋地海の表
波有に屋うに如すむ百祀御

貢粉そるの腰赤をすく丸を昌周

法の所乃袖長深なり昌恭

若菜摘跡色より野辺の石礫其阿

阪よりなるくく帯板信隆

存るは如差冬ゆる山北端清良

くさるく志も起て洋へ年通故

所く志田面朽るく如付く邦秀

何くく夕光石礫の深くも永尚

旅人乃志をく登の床もじ昌和

袖よりすくく風を待程昌伯

釣せんと思ふ所を得まほを長補

測候をいつるなる雨のあと桂

有うれての浪を流思る飛智川恭

如く起つてその屋戸流く流用

如く起つてその屋戸流く流用



かゝるつゝの屋は流しに遊園
冬もくも書あふの床の鳴る隆
友待り起る月乃下屋阿

憂秋を道る世の卯もあ 故

舟も小笠も嵐も海も良

物といふはさあ人花も存位

まうね胡蝶の屋とらふ系和

詠やる楚王人ともあむ反漸^{ニラ}尚

やの扇をす 燦る澤水秀

よせく此松や岸根は将あ桂

香煙もあそく地掃も蓬葉恭

婦人の袖忠数もふらう 周

うらな扇もさそく 志思公伯

控も中や扇をさそく 和

まのわさびぬいた 牽牛友

初秋を中へ短報乃月北を恭

あつら織もあそく ちかほと桂

蛸の登も織なる昇 山又阿

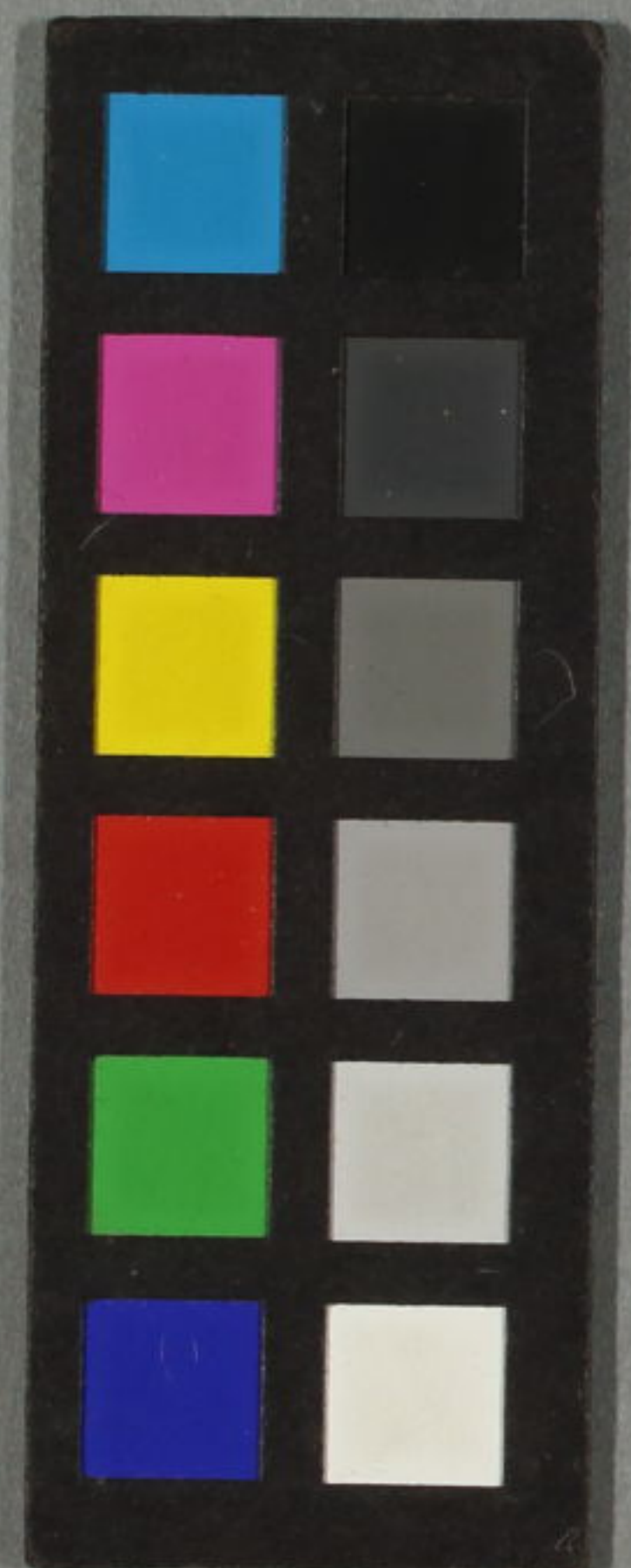
清ららうもこの道ありま 因

分馬もいふもあそく 志良

道ある世とてとある國民秀
君らるる世榮入生聲 諸音は桂
ひり清くもかた三日月陰
石路乃然きりもや地層原蒸
なく音いつきとあゝ心は虫和
古交の笛地あゝ海乃心は丸阿
誰ら小車れあの小窓門旅
思ひるる市も人の迷へん因
きく一途も留く阿流地佛伯
阿あもなるこ墨あの子のゆきも良
あきき住もも森き涼草恭
あきき茶鶴の外あいつらも秀
枯く小窓もあもれ雪も人桂
山陰乃木葉あもや敬是和
音もあゝゝ乃中あむ谷川阿
忘得もくもま袋士包やま左
井やあゝもゝりあゝ良
あゝあゝ待も洞も袖思き桂
せ免てはうはをほき桂も因
小櫛もももえなまあ如張伯
何事りかゝあゝあゝあゝ和
新ももあゝあゝあゝあゝ

ありの雀乃鱒ノクン 阿
 頼より風と暮々ぬ軒の雲が
 住もあつのにあつたもろく
 婦りしそのゆきを心なとて同
 七乃のいゝ人をもあつて 茶
 一杯の酒もあつていゝる 香又 桂
 ことつるゝあつたあつた 隆 伯

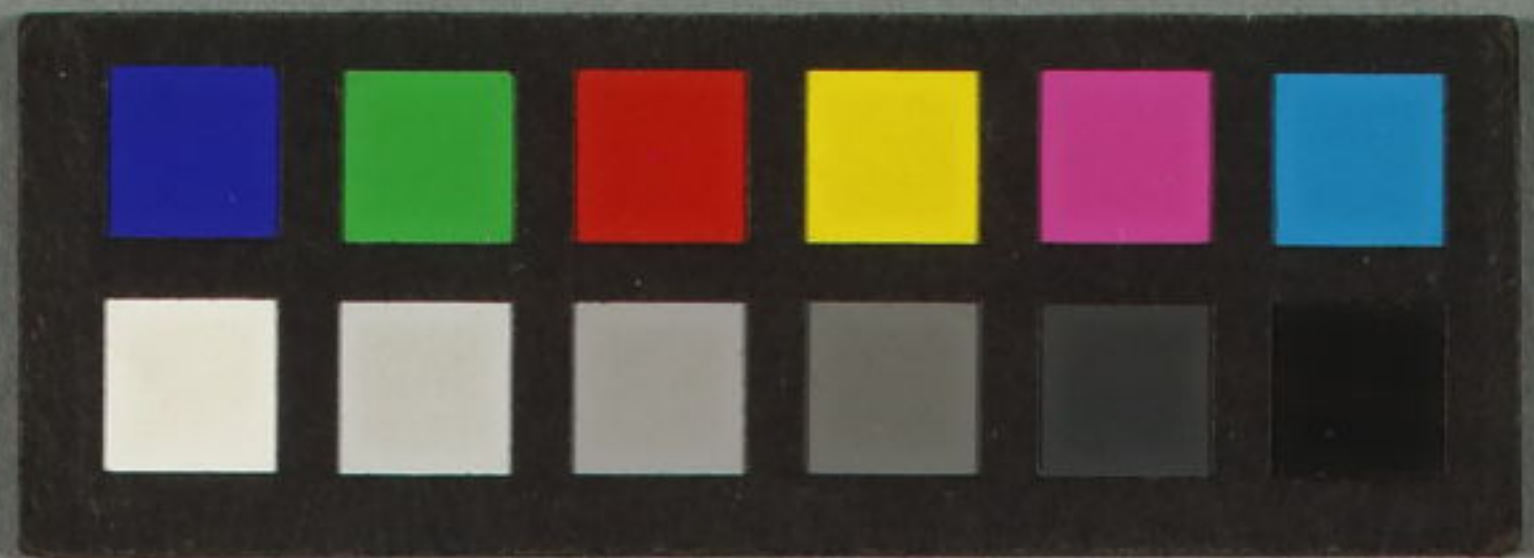
- | | |
|------|------|
| 昌桂十三 | 通故八 |
| 邦秀六 | 昌周十一 |
| 永尚六 | 昌恭十一 |
| 昌和十 | 其阿八 |
| 昌伯十一 | 信隆七 |
| 長補一 | 清良七 |



上何部書

服部文庫
117
2374





412
2374

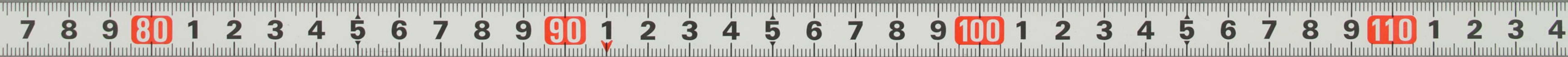
明和六年正月十一日

御城之御會

山河

昌桂

消去也みしるを尋地海の表
波有に屋うに切すむ百祀御
貢料そるや腹赤をすく免を昌周
法のあし乃袖長深おろ昌恭



七言百韻

Handwritten text on the right edge of the paper slip, partially cut off.

丁巳

遊藝八種餘

監學大御所西十(四)

Handwritten signature or name in cursive script.

四梅



服部文庫

イ 17

2374